

「痴人の愛」より抜粋

彼女はうつつりと、剃刀の刃で撫でられて行く快感を味わっているかのよう、瞳を鏡の前に据えて、大人しく私に剃らせていました。私の耳には、すすすすと引く睡いような呼吸が聞え、私の眼には、その頤の下でピクピクしている頸動脈（けいどうみゃく）が見えています。私は今や、睫毛の先で刺されるくらい彼女の顔に接近しました。窓の外には乾燥し切った空気の中に、朝の光が朗かに照り、一つ一つの毛孔が数えられるほど明るい。私はこんな明るい所で、こんなにつまでも、そしてこんなにも精細に、自分の愛する女の目鼻を凝視したことはありません。こうして見るとその美しさは巨人のような偉大さを持ち、容積を持って迫って来ます。その恐ろしく長く切れた眼、立派な建築物のように秀でた鼻、鼻から口へつながっている突起（とつこつ）とした二本の線、その線の下に、たっぷり深く刻まれた紅い唇。ああ、これが「ナオミの顔」と云う一つの靈妙な物質なのか、この物質が己の煩惱の種となるのか。……そう考えると実に不思議になって来ます。私は思わずブラシを取って、その物質の表面へ、ヤケにシャボンの泡を立てます。が、いくらブラシで掻き廻しても、それは静かに、無抵抗に、ただ柔かな弾力を以て動くのみです。……

……私の手にある剃刀は、銀色の虫が這うようにしてなだらかな肌を這い下り、その頂（うなじ）から肩の方へ移って行きました。かっぶくべのいい彼女の背中が、真っ白な牛乳のように、広く、堆（うずたか）く、私の視野に這入っ

て来ました。(中略)……

「讓治さん、手が顫えるわよ、もっとシツカじやって頂戴。……」(中略)

「ナオミ！ ナオミ！ もうからかうのは好い加減じつへね！ よ！ 何でもお前のミジメは聴へー」(中略)

私は彼女の足下に身を投げ、跪(ひざまず)いてきました。

「よ、なぜ黙っている！ 何とか云ってへね！ 否(いや)なら口を殺してへねー」(中略)

「じゃあ口を馬(うま)にじつへね、いしかのやうに口の背中へ乗っかってへね、どうしても否ならそれだけでもいいー」

私はそう云って、そこへ四つん這いになりました。一瞬間、ナオミは私が事実発狂したかと思ったようでした。(中略)が、忽ち彼女は猛然として、凶太い、大胆な表情を湛(ただ)え、どしんと私の背中の上へ跨がりながら、

「や、じつじつか」

よ、男のような口調でミエました。

「うん、そむじつ」

「じつから何でもミエのじつを聴へか」

「うん、聴へ」

「あたしが嫌(きら)みだけ、ごんじつでもお金を田すか」

「田す」

「あたしに好きな事を田せるか、一々干渉なんかしないか」



「うしろ」

「あたしのことを『ナオミ』なんて呼びつけてしまいで、『ナオミちゃん』と呼ぶか」

「誰が」

「おっちゃん」

「おっちゃん」

「よし、じゃあ馬でなく、人間扱いにして上げる、可哀そうだから。——」
そして私とナオミとは、シャボンだらけになりました。…………

***留意事項**

- 部門・エントリーナンバー・氏名・作品名・本文の順でお読みください
- 中略は読みません
- 複数応募の場合でも、一課題ごとに録音してください（連続録音は不可）
- 効果音やBGMは使用不可
- 群読や複数での朗読は不可
- 朗読より大きな音、二重録音など録音状態の悪いものは不可